

# Top Interview

— 変革に挑む —

まとめ／堀水潤一 撮影／平山 諭

## 津田塾大学 学長 高橋裕子



### 「津田スピリット」を受け継ぎ それぞれの場で 変革を担う女性になってほしい

**津** 田梅子は、本学を創立する以前、官立の華族女学校を休職し、自身二度目となる留学をしています。行き先は米国のプリンマー大学。当初は2年の予定でしたが、1年の延長を願い出たのは、現地で寄付を募り、奨学金制度を設立することを決意したため。目標の8000ドルを集めると、その利子で4年に一人、日本から同大学に留学生を送れると考えたのです。

結果、1976年までに25人の女性が留学を果たしました。その中には、後に本学塾長(当時)となる星野あいをはじめ、全国各地の学校創立者や教育者、国連総会の政府代表などが名を連ねています。19世紀末、米国人の寄付によって作られた奨学金制度

で学んだ女性たちが、その後の日本の発展を支えてきたわけです。

確かに津田梅子は傑出した人物でした。ただ、自分が得たことを内に閉じ込めるのではなく、次の世代に返し、広げていくことを常に考えていました。これこそ「津田スピリット」であり、その精神は脈々と受け継がれてきました。例えば、それまで敵性語とされた英語が再び求められたとき、同窓会長であった広瀬千代子氏が戦後いち早く千駄ヶ谷で始めたのが津田英語会です。その収益による寄付が大学の財政を支え、ひいては2017年に千駄ヶ谷キャンパスに開設された総合政策学部の礎にもなっています。本学は、118年という長い歴史に

もかわらず、卒業生数は3万2000人程しかいない小規模の大学です。しかし多くが、それぞれの場で変革を担い、次の世代を支援しています。

ミッションステートメントには「弱さを、気づきに。強さを、分かち合う力に。不安を、勇気に。逆境を、創造を灯す光に」とあります。そうした力や心を磨くためには、慣れ親しんだコンフォートゾーンから抜け出し、異なる場所に身を置くこと。できれば若いうちに国境を越え、違う文化に身を置いてほしい。自分を客観視する経験が将来に影響を与えてくれるでしょう。

私自身、長く留学を経験するなかで、仕事をすることの楽しさや幸せなども学びました。学長就任後も学会や国際会議で外国を訪れる機会がありますが、そこで気付くのは、雰囲気や飲まれることなく、異なる意見でも堂々と述べる世界の女性の力強さです。

日本のジェンダーギャップ指数は下位に位置したままですが、2030年に向け、さまざまな組織において上位職に就く女性が増えていくはず。そうしたなか、自分の考えを自信をもって述べる力はますます求められます。産業構造が劇的に変わるうが、人と人が気持ちを通じ合わせることの重要性が変わることはありません。

【学長プロフィール】たかはし・ゆうこ●津田塾大学学芸学部英文学科卒業。筑波大学大学院修士課程修了。米・カンザス大学大学院にて1983年M.A.、1989年Ph.D.取得。2004年津田塾大学教授。2016年より現職。専門はアメリカ社会史(家族・女性・教育)、ジェンダー論。アメリカ学会会長、ジェンダー史学会常任理事、日本学術会議連携会員、日本私立大学連盟常務理事。

【大学プロフィール】女子英学塾として1900年に創立。学制改革に伴い1948年に津田塾大学設立。学芸学部は英語英文学科(2019年度に英文学科より名称変更)、国際関係学科、数学科、情報科学科、多文化・国際協力学科(2019年度新設)、および総合政策学部(総合政策学科)の2学部6学科。